

# 一心寺かわら版

第五十三号 令和三年九月発行

持名山一心寺 検索

## 法事（法要）って必要なものですか？

仏教に関するSNSグループに次のような書き込みがありました。

法事（法要）って必要なものですか？何の意味があるのですか？

老いた母から、明日、父と祖母の法事を近くのお寺でするから一緒に行くことのこと。死んだ者を捧んだところで何になるのですか。とりあえず母を連れてお寺には行きますが、手を合わせて拝むということは私は絶対しません。

今こうして自分が存在するのは先祖がいたから、これは理解していますし親は敬わなければなりません。しかし死んだらそれで終わりですから敬うことも生きている間だけで、その後は仏壇や墓に手を合わせて拝むことはするつもりもありません。

無宗教の私にも理解でき、仏教のあらゆる宗派に共通する説明のできる方はおられませんか。

同じように思う方もいらっしゃるかもしれませんが、私たち僧侶は、浄土真宗では…と型通りに答えてしまいがちです。

しかし、ここは誰でも参加できるSNSグループ、みんな自由に発言します。そこには経験を通じた実感がこもっています。

コロナ禍。人との接触が制限され、法事も十分に勤めることができないう今、改めて法事について考えてみましょう。

【Aさん】私は親が亡くなるまでは、例えば会ったこともない祖父や祖母に対して思い惚ぶ気持ちには起こらなかつたけれども、父が亡くなった後は、そういう気持ち芽生えました。

なんでもない昔の父との記憶が蘇って涙ぐんだり。そんな時に父に対する思いをどうすれば良いかと考えた時、やはり仏の前で祈るしかなかったですね。

【Bさん】私は僧侶の方がお経をあげてくださっているとき、故人に仏法を教えてくださっているのだととらえています。父が亡くなってお経をあげていたとき、父が傍らにいて一緒に聴いているような気がしました。難しいことはわかりませんが、故人を思って手を合わせるとき、側に來てくれる気がします。

【Cさん】こういう風に考えてみては如何でしょう。法要は「親孝行の機会をくれた」と。墓があるから、面倒くさい法要があるからお母様は、貴方に会えるのです。そして貴方もお母様に会えるのだと。

【Dさん】うちの父、あなたと同じ考えでした。子供の頃病気で目が見えなくなり、自分一人が頼りで、死ねば何も無くなるという事を常々聞かされました。でも、母（妻）が無くなる時、自然と亡骸の前で手を合わせお念仏していました。

私もこの歳になり、本当に父母やその先祖に感謝の気持ちが自然と湧いてきました。遠い遠い人類が生まれた時から巡り巡って私があります。なにかの歯車が違っただけで居なかつた存在。皆そうです。それだけで感謝。

自分が必要ないと思われるなら、しなくていいかもしれませぬ。私は亡くなった仏様のためにしていると言うより、生きている自分らのためにさせてもらっているとします。亡くなった方が仏様になって、見守ってくださいていると思っています。

【Eさん】あなたの考えは自由です。しかし、他人の思いに寄り添うことは必要なのではないのでしょうか。現在も過去も未来の人々に対して。人は一人で生きていくわけではありませんので。

神仏の教えといわれるものには、人間が生きていく上での心の知恵があります。また、この世界の全ての物で、人間がゼロから産み出したものなど何一つありません。生きるために必要な空気や水ですら、ゼロから作り出すことはできないのです。

あなたはその事に対して感謝できてますでしょうか。それはどのように表現されますか。

【Fさん(僧侶)】何に手を合わせるか。一般的には「亡くなった方に手を合わせる」が、わかりやすいですが、「亡くなった方を通して、我が身を問うて行く。」生きている時には気付かなかった事、聞き流していた言葉の一つ一つが、今「はっ」と気付く事はないですか。肉体は亡くなっても、この胸の中に生きているのだと思います。

ですから「あー今頃になってわかった」と思うと自然に「ありがとう」有難くて手が合わさる。亡くなってからも私を育てて下さっている、もう一度出会う「出会い直し」…

【Gさん(僧侶)】儀式を行うことの論理的な意味、理由というのは見えにくいものです。ただ、法事だけに限らず、意味がある(と自分が評価すること)しかないのであれば、人生はつまらないものになると思います。

世界中の宗教で、様々な儀式が行われていますが、ほとんどが客観的に見ると無意味に思えるものです。例えば高い場所から飛び降りるとか、体に傷を付けるとか。もちろんそこには深い意味や、長い時間を掛けて積み上げてきた歴史があるはずですから、部外者が客観的な評価をしても仕方ないことです。その儀式に参加することで、本人に大きな変化があることも実際にありますから。

私は浄土真宗の僧侶ですので、法事を「亡き方への弔い」、「布教の場」という宗教的な意味付けをします。もう一つは社会的な意味。亡くなった両親や先祖への感謝を何か形にして表すとすれば、法事を営むということが分かりやすい形になります。

【Hさん(僧侶)】何故みな死者を供養するのか。それはうっすらと死んだ後もなにかあると感じているからです。信じたい人は信じればいいし、信じたくない人は信じなくていい。

仏教にはこんな教えがあります。月のない夜、空を見上げると、真っ暗な夜空の時と雲もよく見える空のことがある。この違いはなにかというと、月は夜空には見えないけれど、月はいつでもそこにあって太陽の光を反射させている。月は出ていないが、ある、ということ。死者を供養する、法要する、手を合わせて拝む、というのは出ていない月を見ることです。



法事を勤める思いはそれぞれです。ただ、お釈迦さまは、苦しみを乗り越えて安らかに生きるために教えを説かれました。法事によって心が安らぐ、亡くなった人の存在を感じる、人生の方向が決まる。どのような形であっても、少しでも苦しみを乗り越えるご縁となればと願うことです。

### 松本紹圭氏の「死者の民主化」について



未来の住職塾を主催している浄土真宗本願寺派僧侶の松本紹圭氏の「死者の民主化」という記事を読みました。これからの葬儀・法事について考えさせられましたので、以下、抜粋して紹介します。

「喪失そのものが不確定で、失ったかどうかはつきりしない喪失」は、あいまいな喪失、と呼ばれる。

コロナのような感染症が蔓延すると、あいまいな喪失が増える。僕の身近でも、コロナで親戚が亡くなったけれど、通常の葬儀をあげることが叶わず、家族ですら遺体に面会することが困難で、そうしたあいまいな喪失体験が心に影を落としているという話を聞いた。

しかし、この傾向は、実はコロナに始まったことではない。もう何年も前から、新聞のお悔やみ欄には「家族葬」「密葬」「会葬お断り」「遺族だけで執り行いました」の文字が並び、大切な人とのさよならの機会が奪われ続けている。

かつてのような大家族時代とは違って、今のように核家族化・単身化が進んだ時代に、果たして弔いの全権を法的な遺族に限定して委任することは妥当なのだろうか。

ましてや、寿命が伸び、生き方や働き方、住む場所も多様化する中で、一人の人の人生をとってみても、実に多様なステークホルダー（関係者）が存在し、その関係性の性質も、関係性の数だけあると言っている。

その人にとって、いわゆる家族との間で見せる顔は、その人の一つの分人にすぎない。それにも関わらず、その人が亡くなった時、いわゆる遺族しか弔いの機会を持ってないということになれば、その故人の分人の一つしか浮かばれないということになりかねない。そして、取り残された大部分の分人の数だけ、あいまいな喪失が生まれることに、なりはしないか。

今こそ、「死者の民主化」が必要だと思う。関係性に差別なく、誰もが誰をも弔うことのできる世界は、誰もが誰かから「生まれてくれてありがとう」と言われる世界でもある。死者の声に耳を傾ける機会を大切にすることは、まだ生まれていない未来世代に意識を向けることにもつながるはずだ。今この世に生きる人の数をはるかに超えた、死者と未生者の間のいのちのバトンをつなぐところに、私たちの人生がある。

目に見えないステークホルダーとのつながりを大切に「死者の民主化」の推進は、未来世代につながるこれからの社会の土台になると、信じている。今、私たちが進むべき方向を間違えないためにも、これまで存在した耳を傾けるべき多様な声を反映していかなければならない。

画家ゴーギャンが『われわれはどこから来たのか、われわれは何者かわれわれはどこへ行くのか』という絵画のタイトルに込めた問いを、再び問い直すべき時が来ている。

日本仏教の先祖供養しかり、ネイティブアメリカンの七世代思考しかり、目に見えない人々をこの世界に現前させ、今を生きる私たちの意識とつなぐ技術は、世界中の伝統的な宗教やスピリチュアリティの伝統文化の中に、見出すことができる。

伝統宗教に関していえば、そもそもが、日本の神社仏閣をとってみても、時代の変化の荒波に耐えて数百年という長い時間軸の中で受け継がれてきた歴史そのものが、私たちと死者をつなぎ、そしてまたこれから生まれてくる未来世代に意識を向けさせる装置として機能している。

自然だってそうだ。今、僕らが豊かな里山の風景に触れることができるのも、過去に手入れを続けてきた人たちがいるからだ。彼らもまた、山に木を植えてきた人と同様に、その成果を受け取るのが自分ではないことを知っている。今、日本では山林の維持や保全ができないことが問題になっているけれど、それもまた、目に見えない人々との意識のつながりを僕らが失ってしまったことも、関係しているのではないだろうか。

「死者の民主化」は、そうした宗教や自然といった領域に親しんで生きる、悠久の時間軸でものごとを考え、行動する人々が力を合わせて成し遂げられることであるに違いない。

亡き人を想い、その想いを未来の人々へと振り向け、そして今こうしてその間をつなぐところに立っている、私自身の生き方を問う。そんな「グッド・アンセスター」(よき先祖)文化の担い手の一人でありたいと心から思う。



### 春季永代経法要報告

コロナ禍のため、時間短縮しての法要。お勤めも法話も住職一人で。この秋も同様に勤めます。来年こそは平穏になればと願いつつ。



### YouTube「一心寺 お寺の掲示板法話」

コロナ禍で十分な法要が開催できない現況。そこでYouTube「一心寺チャンネル」でお寺の掲示板法話を始めました。お時間がありましたらご覧ください。



### 万灯会&ぶちしるべ 延期のお知らせ

竹灯籠に思いを込めての万灯会と夜の境内を彩るぶちしるべ。コロナ禍のために延期し、十月二十三日(土)開催に向けて準備をしています。後日改めてご案内いたします。

